さそりの眼の下で

囚われの女たち
第六部

山代　巴

径書房

囚われの女たち　第六部
さそりの眼の下で

一九八三年七月二十日発行

定価　一五〇〇円

著　者　© 山　代　巴

発行者　原　田　奈　翁　雄

発行所　株式会社　径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二―一三―五彫山ビル
電話　〇三―二三四―四六〇八
振替口座　東京一―三二七二六

印刷　明和印刷株式会社
製本　株式会社　積信堂

0093―1006―2507

囚われの女たち　第六部

さそりの眼の下で

山代巴

カバー絵　山代草子
装釘　山口泉

目次

豪雨と花と　7
ノート「星の世界」　63
星と刑余と　94
命燃えて　147
沈黙を破る群　179
火の文字の夜へ　218
若草の萎ゆる日　268

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

さそりの眼の下で

豪雨と花と

一

一夜の宿の広島刑務所を出るとき、三十六人の女囚はうす暗い廊下で捜検を終えると、まばゆいほど明るい外に出て、裏門ぎわの二台の護送車に分乗した。護送車は昨日彼女達を広島駅からこの裏門へ送って来たのと同じ、幌をかけたトラックだった。八十三番は今朝はもう自分の力だけでは歩けず、元気な六番に負われていた。病人を背負う六番は踏み台からトラックの端へ「よっこらしょ」と掛け声をかけてよじ登った。先に上がっていた看病婦の十九番は、六番がよじ登ると八十三番を抱き取って、泥によごれた床に寝させた。光子はその後からよじ登り、未成年たちが腰掛けている二十センチ幅の長腰掛けの端に腰をおろした。看守が背後の幌のとばりをおろしたが、そのとばりには外の見える小さな窓が開けてある。光子はそこから外を見た。赤い煉瓦

の壁に鉄窓が点々と並ぶ広島刑務所の威容が見える。あの窓のどこかには常夫がいると思うと、去り難い思いだった。

トラックは動きだした。彼女は思った、自分の刑期はもう半分過ぎている、夏が来れば三分の二が過ぎる。成田所長や津村部長の見通しを信じるなら、遅くも夏には仮釈放の恩典がおりるだろう、そしたら第一番に彼に面会に来ようと。

護送車が市中を走るとき、昨日の昼から今朝までの三度の飯のまずさを思うと常夫がいとおしくてならないが、遅くも刑期の三分の二を無事に勤め終えれば会いに来れると、はかない希望に自分をはげましていた。

軍都広島の戦中の朝の駅はあわただしい雑踏だった。駅前に横づけの二台の護送車から降りる、手錠と腰縄のない三十六人の女囚を、もれなく汽車に乗せることは役人にとっては血眼の作業だったろう、護送車を降りたところで点呼、改札口を出ると、出るとすぐの一番ホームに整列させてまたも点呼だった。雑踏の人々は三次(みよし)駅でと同じように、しらじらとした目でそれを取り囲んで、聞こえよがしのいやがらせや放言を交わしていた。

女囚たちは知らなかったが、この朝早く成田所長の命令で、部長と男看守が広島市の西の玄関の己斐(こい)駅（現在の西広島駅）へ行き、そこから門司発東京行の各駅停車に乗り、広島駅までの間に、後から三輛目の中ほどに、女囚三十六人と、十二人の役人がかたまって乗れる座席を確保していたのである。一番ホームの懲衣や官服のかたまりの前を、汽車はピーッと汽笛を鳴らしながら徐行した。後に近い車輛のデッキに立つ男看守が手を上げて、

「ここだー、ここだー」

帽子に赤い筋のある駅長や助役らしい人、車掌、駅員、成田所長以下十二人の役人、その人々に取り巻かれて女囚たちは汽車に乗った。誰も逃走する者はいなかった。

八十三番が重態だったから、彼女は座席につくとすぐに寝かされ、看病婦の十九番と耕耘婦の六番に看守一人でそのボックスは一杯になったから、光子はその前のボックスに、癲癇もちの七十二番と向き合い、光子の横にはリュウマチの九十三番、九十三番の前には、いつもは見かけない工場担当の若い女看守が腰掛けた。

汽車はプラットホームを離れた。やがて町はずれらしい甍の波の上に山がのぞいた。光子は進行方向に向って左の窓ぎわにいたから、昨日の芸備線の車窓から眺めた白木山はどのあたりだろうかと、遠い稜線に探すような目を向けた。幾重もの山の重なりの彼方にある山波は青く霞み、どれが白木山かわからないが、光子の瞼には、白木山から遠くない渓流に姿を映していた白梅の古木と、平野へ出たばかりのところの藪のきわの紅梅の若木の姿が幻のように浮かんできて、やがてそれは唖の老婆と少女命芳の姿と重なり、あの二人の生きざまが自分の心の奥を捉えていなかったら、自分の旭硝子工場での歩みは、ああはならなかったろうと思った。

二

光子が旭硝子鶴見工場の女工になったのは、六年前の六月だった。同じ日に呼び出しを受けた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

十八人の女工たちが、事務所の前の朝靄の中に群がっていると、朝のサイレンが鳴った。採用試験のときにも世話をした女事務員が、名簿を持って出て来て名前を呼んだ。星野姉妹もいる、萩城ヨシ子も金城ハルも野村トキエも菊池八重もみんないた。

「さあこっちへ入ってください」

事務員について事務所の通路のようなところへ入ると、事務室と向かい合っている壁に工員のタイムカードを入れる状差しのようなものがずらりと並んでいる。

「ここがあんた達のカード差しです。めいめいの名前のあるカードを取ってください」

十八人はそれぞれ自分の名前のカードを取った。事務員は手まわしの金属製の箱のそばに立ち、

「出勤したら必ずカードをこの中へ入れて、ここをまわしてください。時間が押されたらカードをカード差しに戻してから更衣室へ行ってください。帰りも必ずカードに退勤の時間を押してから帰ってください」

女工たちはそれぞれ自分のカードへ時間を押して、不思議そうに眺めてはカードを元のところへ戻した。

「さあ、皆さん、二列に並んでついて来てください」

事務所を出た二列の縦隊は見なれない風景にきょろきょろしながら、事務員について芝生の丘の道を上がった。右手の丘の下には工員待合室の小さな建物が見える。左手には娯楽室のような木造の建物や、三階建かと思える高い新築の工場もあるが、事務員はそちらへは行かず、奥の方の倉庫かと思える建物へ十八人を連れて入り、

「にわか作りの仮の更衣室ですからね、足もとに用心してくださいよ」
足もとは薄暗く、でこぼこの土間だった。そこに風呂屋の衣類入れのような木の開き戸のついた、横三十センチ、縦四十センチぐらいのボックスが幾列もずらりと並んでいて、その一つ一つに名刺大の白い紙に名前を書いたのが貼ってあった。そして上段の人と中段の人とが下段の一つを傘や下駄の置き場にするようになっていた。各人が自分の名前の貼ってあるボックスを見つけて、その中へ弁当包や手提げ袋などを入れ、履いて来た下駄を草履に履きかえ、着物の上から白い割烹前掛けをかけ、割烹前掛けの上から腹部だけがおおえるような小さいサロン前掛けをしめて、腰紐のところに汗拭きの手拭を挟み、髪がよごれないように手拭をかぶる者もいた。光子は三光商会時代にかぶっていた夏の女児服用の細かい花柄の木綿の端切れで作った三角布をネッカチーフのようにかぶった。
「用意ができたらついて来てくださーい」
と事務員は歩き出した。薄暗い更衣室を出て、木造の娯楽室のような建物の南側の壁にそって右へまがると、新築の高い建物が見える。新築の建物には幅が三メートルもあろうかと思える鉄板の大戸が二枚あって、そこを入るとコンクリートの床の広い空間が、隅から隅まで屋内とも思えない明るさだった。一行が部屋の中ほどまで来ると、
「この職場の監督さんと助監督さんが来ますからね、待っていてください」
事務員は突き当りの右端にある、現場事務所らしいボックスの方へひらひらと走って行った。
ボックスからは二人の男が出て来た。一人は顔にも肩にも丸みのある中年の紳士で、白い開衿

シャツに灰色の作業ズボンをはいていた。一人は蚊トンボのように痩せて目玉をぎょろぎょろさせた気短かそうな若者で、同じように白い開衿シャツに灰色の作業ズボンをはいていた。二人は新採用の女工たちの前まで来ると立ち止まった。中年の紳士は両手を後に組み、

「えーと、私はこの安全ガラスの総監督前芝といいます。みなさんはこれから私の指図に従って働いてもらうのだが、えーと、先ず休めの姿勢で聞いてもらいたい」

そんな前置きで、

「ここでみなさんの扱う板ガラスは、敵陣深く忍びこんだ偵察機が空中写真をとる時などに使う最高級の乾板にするものです。こんどの戦争が始まるまで日本軍は軍用の高級乾板は外国から輸入していましたが、戦争が長びくに従って外国からの輸入品には頼れなくなりました。そこでどうしても日本人の力で、ドイツ人やイギリス人に劣らぬものを製造しなければなりません。そこで軍はこの製造を当旭硝子工場にゆだねました。この職場の隣りの棟の熔鉱炉では、目下毎日その製造のために辛苦しております。この職場へは隣りの職場で製造された乾板用板ガラスがああして運ばれて来るのです」

監督が「ああして」と指さす右手の、隣りの棟との境の壁のほぼ中央にはエレベーターのボックスがあって、そこからは二メートル四方もある板ガラスが、上部を大きな紙挟(かみばさみ)のようなものにはさまれて降りて来て、上空に取り付けてあるレールにぶら下がって現場事務所の反対側の右隅の大きな裁断機の方へ運ばれている。裁断機のところには若い男工が十人ぐらいいて、レールからはずされて台に乗せられ、台と共に動く大きな板ガラスを、天井から取りつけてある縦横に動

く裁断機で、菊判ぐらいに切り、それを何枚か重ねてそばのトロッコに載せている。
「あそこでトロッコに載せられた乾板用安全ガラスが、そこの仕事台まで運ばれて来る。そこからがあなた方の仕事です。前にはこの会社は女工というものは使わなかった。けれども今日では、男子はどんどん戦線へ送られて行くので、女子が男子に代って工場を守らねばならない時代になろうとしています。みなさんはそのさきがけとして採用されて来たのだから、聖戦の一翼をになって、世界を征服するような気持で、困難に耐えて立派な成績をあげるように一所懸命に努力してください」
　ざっとそんな訓示をして、
「わたしは隣りの熔鉱炉の方も見ねばならんので、普段こちらの仕事はこの細田君が責任を持っていますから、用事はこの細田君を通すようにしてください」
　そこでまた「えーと」を繰返してから、裁断機の方へ、
「おーい、井原！　南！　古城！」
　呼ばれて走って来たのは、三人とも二十歳にならないような青年だった。
「この人たちは旭硝子の尼が崎工場で、安全ガラスの試作時代から作業を習得して、この度は指導員として私について当工場へ来ました。みんな品行方正、今からあなた方に仕事のやり方を教えますから、早く覚えて、早く仕事になれてください」
　前芝監督はそれだけを伝えると、細田助監督と現場事務所へ帰った。
　三人はそれぞれ名前だけの自己紹介をすると、先ず全員を六人ずつ三列に仕事台へ向わせ、一

列に一人ずつがついて、白い軍手と、手首から肘までを防御するための腕巻きを配った。腕巻きは白い綿糸を厚い綾織りにした細長い布で、布の先には白い真田紐（さなだひも）が付けてある。これを脚絆（きゃはん）を巻くように手首から肘へと巻き上げて、最後のところを真田紐でとめる。あまりきつく巻くと血行が圧迫されて作業がにぶる。ゆるく巻くと次第にゆるんで落ちて来る。先ずそのコツを実地で訓練する。光子の列の六人を受け持った南は、大仏さんのように髪のちぢれた青年で、恥かしそうに赤くなって一人一人の腕巻きの巻きかげんを教えたが、光子のすぐ後の列を受け持った井原は、三人の指導員のうちの一番年上のようでもあり、また責任者のようでもあり、冗談を言って女工たちを爆笑させながら指導していた。

仕事台の一人一人の右手の前には「型に高さ二十センチぐらいな薄板を貼った本立状の台、左手の前には「型に薄板を貼った、右手の前のと同じ大きさの本立状の台が置いてあった。運搬係は裁断機のところからトロッコで運んで来た菊判ぐらいの板ガラスを、左手の前の台へくばって歩いた。

ガラスは薄く、四、五十枚がまるで四角な氷の固まりのようにそこへ立った。指導員は仕事台の前方からガラスを拭く白いネルの布をくばった。それは幅二十センチ、長さ四十センチぐらいの大きさで、これを棒状に巻いてガラスの曇りをおとす、それが拭き手の作業だった。

ネルの布を手頃の柔らかさの棒状に巻くコツを覚えると、それを右手に持ち、左手を前に伸して、ガラスを一枚取って手もとに引き寄せ、右手のネルの棒で上から下へ何度も拭き、曇りがすっかり取れると裏返して同じことを繰返し、透明になったら右手の前方の「型に板を貼った本立

状の台へ置く。指導員は一応の作業の手順の次には、一人一人のネルの棒への力の入れ方やガラスのこすりかげんを見てまわる。拭きあがったガラスが一枚一枚「状にもたれの板のある台にびっしりと並んで、矩形の台一杯になると、運搬係の男工が台ごと抱えて拭き手の仕事台の右のはずれへ運ぶ。そこには鉄製のローラーを連結した細長い台がある。百枚も重なった板ガラスの箱がこのローラーの台の上では軽く動く。ローラーの台の向うの窓ぎわには選別台がある。

今日の新採用より十日ほど前に十二人の女工が採用され、そのうちの六人は今日採用された十八人の拭き手の前の一列でガラスを拭いているが、その他の六人は、選別係になったり、包装係になったり、現場事務所の給仕になったりしている。

選別は、一番右の一人は泡のあるのとないのを選り分ける。次の一人は泡のない板ガラスの中から筋や傷のあるのとないのを選り分ける。その次の一人は泡も筋も傷もない板ガラスが、かすかでも凸になったり凹になったりしているのを見付け出して不合格にする。不合格ガラスは「状の台に乗せてローラーの台へ返される。運搬係の男工はローラー台の不合格ガラスをトロッコへおろして裁断機のそばの穴の口へ運び、地下へほうり落とす。すべての選別に合格した板ガラスは紙巻き台へ運ばれる。ここにも女工がいて、一枚一枚のガラスの間へ白い薄い紙をはさみ、包装へ送る。ハトロン紙で小包状に包装されたものはトロッコで、この職場の南の大戸から倉庫へ送られる。これだけの作業が光子の採用された職場の全工程だった。

一枚一枚のガラスには、製造中についた粉塵や裁断するときの切り粉がついている。これをネルの棒でこすると、わずかずつネルの繊維は切れて綿埃（わたぼこり）になる。一枚のガラスを透明に拭きあげ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo